

4. 「コロナ禍における地域医療への貢献 ～エクモカー寄贈&当行研修センター活用～」

(千葉銀行)

1. 取組の概要

- ・新型コロナウイルス感染症の影響が長期化する中、地域住民の健康と安心を守り、住み続けられる街、サステナブルな地域社会を実現すべく、千葉大学医学部附属病院に地元企業が開発した最新鋭のエクモカーを寄贈(寄贈後、5Gを活用した映像・音声伝送システムをエクモカーに搭載)。
- ・千葉県に当行研修センターを提供し、臨時医療施設・宿泊療養施設として活用され、地域医療体制の充実に貢献。

2. 取組を始めるに至った経緯、動機等

- ・当行は地域の社会課題の解決や地域住民の豊かなライフスタイルの実現に向けたサポートなど「社会的価値の提供」に取り組むことを目指しているが、コロナ禍により、地域医療体制の充実がこれまで以上に重要視される中、コロナ禍の最前線で対応にあたる地元医療機関や医療従事者、行政を全力で応援し、県内の医療体制の充実をサポートすべく取組を開始。

3. 具体的な取組内容

- ・2021年11月、当行及び日本財団が千葉大学医学部附属病院にエクモカーを寄贈(地元企業が車体提供及び車体設計・開発、エクモ専用ストレッチャー開発を担い、「チーム千葉」が作り上げたマイクロバスタイプのエクモカー、県内初導入)。
- ・2021年11月、臨時医療施設・宿泊療養施設として活用するため、当行研修センター(千葉県千葉市)を千葉県へ無償で提供。民間施設を活用した臨時医療施設として県内初事例。
- ・2022年2月、寄贈したエクモカーに5Gを活用した高精細リアルタイム映像伝送、及び双方向音声伝送システムを搭載。5Gネットワークを通じて搬送中の患者の映像やバイタルデータを送信するシステム。最大4つの映像を同時送信し、病院側では全ての映像を1画面で確認できる。その結果、質の高い医療サービスの提供、及びオペレーションの効率化が可能となり、救急現場における医療従事者の負担軽減を実現。

4. 実施にあたり工夫した点(金融機関の役割・推進体制面・PDCAサイクル面等)

- ・当行を中心に立ち上げた(公財)ひまわりベンチャー育成基金(理事長は当行頭取)のネットワークを活用してエクモカー開発チームを結成。
- ・銀行本部建替えに伴い、利活用方法を検討していた当行研修センターを有効活用。相応の規模を擁する施設を迅速に提供したことで、まとまった病床を効率的に確保でき、千葉県の病床確保計画に貢献。
- ・当行研修センターの施設構造が宿泊棟と研修棟の2区画に分かれていたことで、ゾーニングを容易にし、感染症対策にも適していた。
- ・フェイスシールド寄贈や医療機関支援目的の私募債(2022年12月末時点:114件/20,798千円寄付)を通じて、地元医療機関等を継続して支援。

5. 取組の成果(取組中の場合は目標値・KPI等)

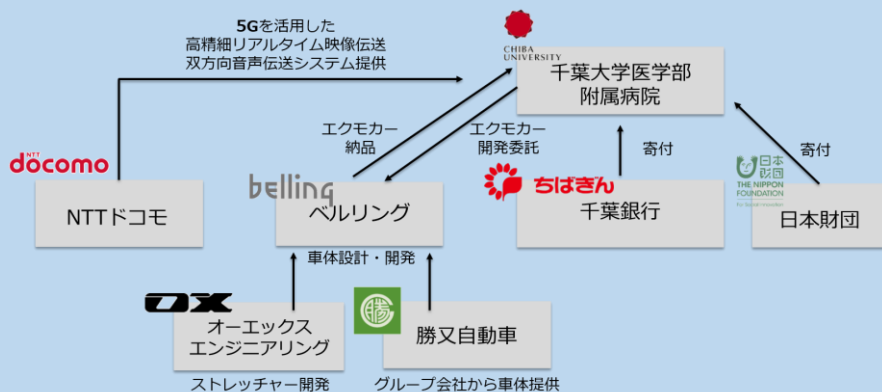
- ・エクモカーの出動回数は累計12回(2022年12月末時点)。人工心肺装置を装着したエクモ患者の転院時の出動に加え、人工呼吸器などの精密機器を付けた重症患者を安全に搬送。今後は、重症患者の搬送に加え、災害現場や救急現場に出動し、緊急処置が必要な患者の移動式診療スペースとなる“走るER(救命救急室)”としての利用も期待されている。
- ・臨時医療施設・宿泊療養施設として、累計858名が当行研修センターを利用(2022年12月末時点)。第7波を受け病床が逼迫する中、地域医療の体制維持に貢献。今後も千葉県からの当行研修センター提供の延長要請には出来る限り応じていく。

地域住民の健康と安心 住み続けられる街、サステナブルな地域社会

地域医療体制の充実

エクモカー事業

体制図



車両概要



- ✓ マイクロバスタイプのエクモカー
- ✓ 広い室内空間（患者2名、医療スタッフ5名、運転席2名の最大9名が乗車可能）
- ✓ 多種モニタリング機器や照明も多数設置
- ✓ 開胸や開腹手術が可能
- ✓ ドライバー席と治療スペースの空気の流れを制御し、ドライバーの感染予防
- ✓ エクモカー専用ストレッチャー搭載（国内初）

研修センター活用事業

研修センター



臨時医療施設（110床）
宿泊療養施設（38室）



大研修室を活用した病床
駐車場に設置した
プレハブ型宿泊療養施設



5Gを活用した高精細リアルタイム映像伝送
双方向音声伝送システムを搭載

- ✓ エクモカーから搬送中の患者の映像やバイタルデータなどリアルタイム映像伝送は国内初
- ✓ 搬送中に病院で高精細な映像を確認しながら的確な指示を出せることで、効率的かつ早期に患者への処置が可能
- ✓ 救急搬送時の状況、処置内容を研究データとして蓄積可能